==========
GCOE NewsLetter
[No.51　2011/12/26]
----

gCOE第13回国際研究集会の概要
「テクスト布置解釈学各論」（講義科目）の要約
gCOEオフィス移転のお知らせ

==========

■ gCOE 第 13 回国際研究集会の概要

『哲学的解釈学からテクスト解釈学へ』
日程：2011 年 12 月 9 日（金）～11 日（日）
場所：名古屋大学（文系総合館 7 階カンファレンスホール, 法学部 906 号室）にて開催。
コーディネーター：松澤和宏（名古屋大学大学院文学研究科教授・フランス文学）

第 13 回国際研究集会「哲学的解釈学からテクスト解釈学へ」が、2 名の外国人研究者を招いて、12 月 9 日から 3 日間にわたって文系総合館カンファレンスホールにて催された。まず最初に羽賀祥二文学研究科長から挨拶があり、ついで佐藤彰一拠点リーダーより開会の辞が述べられた。その後に、組織責任者の松澤和宏教授より趣旨説明があった。ハイデッガーにおいて存在論として深化された哲学的解釈学を継承しながら、テクスト解釈の問題を重視したガダマーの『真理と方法』の地平を踏まえながら、フランスで展開されたテクスト論の諸成果を批判的に摂取することで、テクスト布置の解釈学の骨子を提示し、解釈学としての人文学への展望が示された。野家啓一教授（東北大学）は科学哲学の領域においても解釈学の有効性が認められ、アングロ・サクソン系と大陸系の異なる流派の地平の融合が準備されてきた経緯を明快に説かれた。佐々木一也教授(立教大学)は、地平の融合というガダマー哲学の核心をなすテーマについて批判的に掘り下げ、異なる文化圏の間の相互理解に伴う問題に光をあてた。ガダマー研究の第一人者ジャン・グロンダン教授(モントリオール大学)は、テクストを自律した対象としてではなく、あくまでも人間主体の解釈学的経験の場として捉え、解釈行為における問いと答えの弁証法の過程を解明した。松澤和宏教授は、ソシュールにおける言語の科学の探究が解釈学的循環を引きおこして時間の問題に遭遇するに至る過程が草稿に即して明らかにされた。金山弥平

教授は、プラトンにおいて書かれたテクストがどのように考えられていたかという重要な問題について示唆に富む発表を行った。文学的解釈学の権威であるピエール・グロード教授（パリ第 4 ソルボンヌ大学）はバルベー・ドールヴィイの「罪のなかの幸福」を例に寓話的解釈を示して、解釈学の魅力と射程を聴衆にフォーヴェルグ特任准教授はライプニッツとガダマーの関係を観点や地平の概念に着目して相互の関係を論じた。真野倫平准教授(南山大学)は晩年のミシュレにおける歴史哲学の興味深い変化について、鎌田隆行准教授(信州大学)はバルザックを例に取りながら生成批評が次第に解釈学的な問題圏に接近していることを示した。また 11 日午前には並行して法学研究科の森際康友教授、長谷部恭男教授(東京大学)、アンドレイ・マルマー教授(南カルフォルニア大学)、濱真一郎教授(同志社大学)によって法テクストの解釈をめぐる講演・研究報告がなされ、午後には人文学者と法学者との間で、予定時間を超えて続くほど、テクスト解釈学をめぐって白熱した議論が交わされた。国際シンポジウムにふさわしく、英語、フランス語、日本語で、実り豊かな解釈学的な対話が実現されたといえよう。（松澤 和宏）

■ 「テクスト布置解釈学各論」の要約

テクスト布置解釈学各論Ⅲ
釘貫亨（10 月 6、13、27 日、11 月 10、17、24 日）要旨

日本語研究は、院政鎌倉時代に古今和歌集を中心とする平仮名で記された平安王朝文芸に対するテクスト解釈学として始まった。その語学的認識の集約点に「仮名遣い」（藤原定家『下官集』）と「テニヲハ」（『手爾葉大概抄』）が位置した。以後、この認識は中世歌学の解釈技術におけるあたかも車の両輪として持続的に伝授された。近世 18 世紀以後、日本古典学の担い手が広域化と大衆化を実現して、公家や上流武家中心の秘儀伝授的体質と軋轢を生じた。契沖は、自身の万葉集注釈から上代語に規範を置く実証的な仮名遣い論著『和字正濫鈔』（1695）を上梓して定家仮名遣いの無典拠の実態を暴露した。契沖の仮名遣い論を継承した本居宣長は『字音仮字用格』（1776）で上代日本漢字音を復元することを通じて上代日本語音声を再建した。また宣長は、複雑な現象を呈するテニヲハを係り結びとして直観的に認識し、これを一覧表に示し（『てにをは紐鏡』1771）、さらに実証的に裏付けた（『詞の玉緒』1779）。これら近世期の仮名遣い論とテニヲハ論は、明治政府による公文書行政の直接的参照

学説となった。18 世紀の語学的研究には、このほか蘭学文典が学ばれ、明治初めころの国語教科書に蘭学文法の枠組みが初めて国文法に採用された、以後国文法教科書は、洋学系と国学系に振幅しながら、明治 17 年に刊行が始まった近代辞書である大槻文彦『言海』付録「語学指南」に結実した。大槻の論は、洋学と国学の業績を適切に折衷したわが国最初の近代的文法論と高く評価されている。以後の近代日本文法学は、大槻を起点として展開してゆく。大槻を継ぐ山田孝雄は、生きた言語場における伝達成立の根拠に注目し、語や文の定義に際して、カント『純粋理性批判』（1781）におけるモノの認識のあり方を問う「超越論的統覚」の概念を借りて文が成立するところ「統覚作用」が介入するという独自の統語論的根拠を提案した。

■ gCOE オフィス移転のお知らせ

名古屋国際センタービル 15 階に設置されていたグローバル COE オフィスは、当プロジェクトが最終年度を迎えるに当たり 12 月 18 日をもって閉鎖致しました。今後の連絡は、グローバル COE 事務室（052-789-6450）に御願いします。

次回のメール版 NewsLetter の発行は 2012 年 1 月下旬 を予定しています。

GCOE「テクスト布置の解釈学的研究と教育」
Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration
http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/

NewsLetter No.51
発行：GCOE 編集部
編集担当：平野克典
Copyright(C) 2011 NAGOYA UNIVERSITY, GRADUATE SCHOOL OF LETTERS